

変化を生き抜く力を 学校の日常の中で育む

自分の生き方や考え方の軸を定めた上で、必要に応じて目標そのものやそこに至るプロセスをより良いものに修正していく力——想定外の変化に対応するためにも必要なその力を育むには、高校教育においてどのような指導が求められるのか。3人の教師が世代、地域を超えて^{かつたつ}闊達に話し合った。

都市部と地方で異なる 生徒の「自己投資」

編集長 今回の特集では、変化の大きなこれからの社会を生き抜くために

必要な「軸」とその軸に基づいた「修正力」の育成について、大学や産業界の方々に社会の変化の有り様を伺い、更に実際に軸に基づいた修正力を発揮し、環境変化を乗り越えてきた方々にもお話を伺いました。では、学校現場では社会の変化をどのように受け止め、それに対してどのような指導が行われているのか、まず現状を教えてくださいますか。

川村 社会が変化しているということは、私たち教師も1人の社会人

として実感しています。しかし、その変化を受けて、指導を変えようとしている教師はまだ多くはないかもしれません。そして、保護者や生徒は、社会が変化し、将来を見通すことが困難になっていることが分かっているからこそ、より保守的な生き方を選んでいっていると思います。地元志向の進路選択をする生徒が多いのも、安心感を求めている選択であり、不確定要素が多く、不安感が増す社会だからこそ、ある程度見通しが利く、慣れ親しんだ地元で暮らそうと考えるのでしょうか。

遠藤 先が読めないほど、地元志向が強まるというのは私も感じています。3年生の三者面談などで関西や

関東の大学名が挙がると、多くの保護者が口にするのは「その大学に進学して就職は大丈夫なのですか?」ということ。先行きが不安だから、せめて自分の目が行き届く地元の大学に進ませて、子どもを支えていきたいと考えるのでしょうか。

安藤 東京の生徒や保護者の考え方は、真逆だと私は思います。先の見通しが立たないから、自分の価値を少しでも高めようと、留学や第二外国語の習得に関心を持ち、高校の授業以外においても社会で必要とされるスキルを身に付けようと自己投資しているように見えます。しかし、それらは、自分が何をしたいのか、どうなりたいのかを熟考した上での

岩手県立一戸高校 副校長

川村俊彦 かわむら・としひこ

教職歴30年。同校に赴任して2年目。岩手県立花巻北高校、軽米高校などを経て、現職。担当科目は化学。



自己投資ではなく、自分の価値を少しでも高められるのであれば何でも良いという、やみくもな自己投資です。

川村 これまでの社会は、経済的に



東京都立新宿高校
安藤直樹 あんどう・なおき

教職歴10年。同校に赴任して3年目。東京都立八王子東高校、小石川中等教育学校を経て、現職。担当科目は物理。

厳しい時期がありながらも、比較的明るい将来を見通すことができ、成功のロールモデルを描きやすかったからこそ、チャレンジングな進路選択が出来ました。しかし、今は、「ここで失敗したら将来どうなるのか？」という不安感を強く感じさせる社会であり、半面、様々な情報やデータが入りやすいため、自分の将来や伸びしろをある程度予測できてしまう社会でもあります。だから地方の生徒や保護者は、確かな見返りが見込める確実な自己投資を行い、私たち教師も、冒険よりも確実性を



大分県立中津南高校
遠藤源治 えんどう・げんじ

教職歴13年。同校に赴任して2年目。大分県立四日市高校、大分舞鶴高校などを経て、現職。担当科目は物理。

求める生徒や保護者の意向を重視するようになっているのかもしれない。ただ、都市部の生徒たちに先行き不透明で変化の大きな社会を生き抜くスキルやバイタリティーが身に付いているかと言えば、残念ながらそうとも限らないと私は思っています。大人たちから「これからの時代は異文化理解だ」と言われたから、留学してみたものの、短期間の留学でそうした理解が即座に出来るとは限りませんし、留学先で良い教育を受けてきたとしても、その経験を生



ベネッセ教育総合研究所
「VIEW21」高校版編集長
柏木 崇 かしわぎ・たかし

かし、本人を伸ばしていく教育が日本にはまだ整っていません。留学に期待する生徒の様子を見る度に、高校の中にこれからの社会を生き抜く力を養うための、多様な学びが出来る環境をつくらなければいけないと痛感します。

編集長 都市部の生徒も、地方の生徒も、自己投資をする上での「軸」こ「軸」と「修正力」を育むために

日々の活動の中で、

先が見えないから失敗を恐れ、受験校選択でも上を目指してチャレンジする生徒が少なくなつたと感じています。そもそもチャレンジするための出発点となる目標が決

大分県立中津南高校

- ◎設立 1893 (明治26) 年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約200人
- ◎14年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、筑波大、東京大、一橋大、京都大、大阪大、広島大、山口大、九州大、熊本大、大分大などに129人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、西南学院大、福岡大などに延べ242人が合格。
- ◎住所 〒871-0043 大分県中津市高畑2093
- ◎電話 0979-22-0224
- ◎Web Site <http://kou.oita-ed.jp/nakatuminami/>

東京都立新宿高校

- ◎設立 1921 (大正10) 年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎14年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、千葉大、東京外国語大、東京学芸大、東京工業大、一橋大、横浜国立大、京都大、大阪大、首都大学東京などに94人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ1027人が合格。
- ◎住所 〒160-0014 東京都新宿区内藤町11-4
- ◎電話 03-3354-7411
- ◎Web Site <http://www.shinjuku-h.metro.tokyo.jp/>

岩手県立一戸高校

- ◎設立 1911 (明治44) 年
- ◎形態 全日制/総合学科/共学
- ◎生徒数 1学年約120人
- ◎14年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、岩手大、岩手県立大に4人が合格。私立大は、盛岡大、富士大、仙台大、武蔵野学院大、神奈川大に7人が合格。その他進学が42人、就職が53人。
- ◎住所 〒028-5312 岩手県二戸郡一戸町一戸字時前60-1
- ◎電話 0195-33-3042
- ◎Web Site <http://www2.iwate-ed.jp/inh-h/>

まっていけないという場合も少なくありません。人生の目標やこだわり、勉強の目的といった自分の軸となる部分をしっかりとつくるのがまずは大切だと思います。その上で、課題を自分で設定し、挑戦してみて、状況に応じてその後の取り組み方や目標そのものを修正していく体験が欠かせないのだと思います。

編集長 そうした活動は、新しい取り組みとして学校に導入していくイメージですか。それとも既存の取り組みの中での見直しでしょうか。

遠藤 私は既存の取り組みの中で十分に可能だと思います。例えば、部活動もその一つです。指導者が適切にサポートすることで、生徒は明確な目標を掲げて、それを達成するために何をすればよいのかを考え、自分がやってきたことを練習や試合を通してチェックし、自分自身を修正していくことが出来ます。私が顧問を務める女子バスケットボール部では、週末の練習試合の度に「反省ノート」を書き、自分とチームの良かったところ、悪かったところを振り返ります。1年生のうちには目標やこだわりが自分の中に定まっていけない

め、課題を見付けることがなかなか出来ませんが、自分の軸が定まると練習内容なども振り返られるようになります。自分で考えたからこそ自分を修正できるようになるのは、学習面や生活面でも同じではないでしょうか。教師が「こうすればよい」とアドバイスを与えるだけではなく、どうすればよいかを生徒自身が考え、自分の言葉で語ることが重要であり、その中で小さな成功体験を積み重ねながら、社会を生き抜く自信を付けていくのだと思います。

安藤 遠藤先生のおっしゃる通り、ただ部活動に参加すればよいというものではなく、それを生徒にとって気付きを得る場とするためには、指導者の力量が重要です。内省する機会をつくることはもちろん、部活動で身に付けた力が社会で役に立つこと、学習面でも役に立つのだと気付く場面を教師が意図してつくり、生徒が理解できるようにする工夫が必要です。社会人講演会や職場訪問などで、部活動での学びの大切さを実感させられる場面があるにもかかわらず、生徒がそれに気付かず素通りしてしまっていることがよくありま

すから。
川村 運動部であれば、生徒が自分たちで勝つための方法を考え、工夫し、助け合えるか、そしてその経験が社会で後々生きてくることを意識できるかが重要でしょうね。指導者の言う通りに動くだけではなく、自分で考えて動ける部活動になることが大切です。

編集長 そうした教師と生徒の関係は、部活動だけでなく、クラスの中でも必要だと言えますね。

川村 そうです。人は、苦しい場面になると逃げ出したり、楽な選択をしたりしたくなります。そういう心境になった瞬間を捉えて、生徒が自分の弱さと自ら向き合えるように導いていくのは、部の顧問であり、クラス担任です。そうした関係が築けるからこそ、社会が変化しても、同じ人間が毎日顔を合わせる学校という場に価値があるのでしょう。

遠藤 そのような関係を築くためには、普段から教師が自分の思いを語る事が大切ですね。教師自身が一人の社会人として、悩み、もがきながらより良く生きようとしている姿を生徒に見せないと、生徒も本音を

語らないでしょう。

安藤 ただ、生徒に向き合うには、やる気や気合だけでは駄目だと思います。私自身、キャリアを積み重ねるうちに、指導の質を保証できるスキルを身に付けたいと思うようになりました。生徒への熱い思いは必要だけれど、生徒に向き合うためのスキルがなければ、結果的に自分の考えの押しつけになる危険性があります。ですから、面談1つ取っても、そのスキルを組織的に向上させる仕組みが学校には必要です。例えば、複数の教師が生徒一人ひとりについての授業中の様子などを持ち寄って、確認する場をつくれれば、私たちにとってはベテランの視点を知る良い機会となるはずです。時間も手間も掛かることですが、教師も「生徒としっかり向き合えた」という成功体験により、向上心を持ち続けられると思います。

教師も変化に向き合い 挑戦を続ける

編集長 生徒の内面に軸を定めると同時に、実際に自分自身を修正する際に必要とされるスキルを生徒に育



んでいくことも必要だと思います。目標やそこへの到達手段を修正するスキルは、どのような指導によって育んでいけるのでしょうか。

川村 5年後、10年後の社会がどうなっているのか分からないからこそ、生徒たちには自分の知識をうまく使って、その時その時の課題に取り組める力を身に付けさせることが重要だと思うのです。授業におい

ても、知識を身に付けるだけでなく、知識をつなげて新しい価値をつくるような経験を積ませることが重要でしょう。様々な課題に柔軟に対応するためには多様な知識が必要であり、幅広い教科をリベラルアーツとして学ぶことが今まで以上に大切になると思います。根をしっかりと広く張ることで幹が大きく伸びていくように、各教科の知識が横断的に結び付き、知識が知性になる瞬間を授業の中でつくるのが、全ての教科でますます求められていくでしょう。

安藤 前任校でSSH担当だったので、同僚と話し合い、今学んでいる内容が他の教科とどう関連しているかを、授業中に出来るだけ解説していくことにしました。その取り組み後に、「他教科を勉強するため理科が必要か」という点について調査したところ、それまではTIMSS調査での国際平均値を大幅に下回っていた数値が、国際平均値まで急上昇しました。私たちが他の教科で何を学んでいるのかを知り、それ

を踏まえて授業をするだけで、生徒たちの知識が知性になる瞬間はもつとつくれるはずだと確信しました。教科指導の部分でも、教師は教科の垣根を超えて一枚岩にならないといけないと思います。

遠藤 成績を上げるために、私たちは手っ取り早く詰め込む指導をしがちです。知識を普遍的な知性とするためには、詰め込みに頼らない新しい授業に関心を持ち、授業改善のための勉強を続けることが大切です。

川村 私はこれまで様々な授業を見てきましたが、詰め込みをやめて、生徒が自ら考える活動を取り入れても、授業力があれば生徒の学力は落ちないと感じています。詰め込みの授業をやめると学力が落ちるといのは、私は教師の固定観念だと思います。生徒を信じ、自分の授業改善を進めないと、これからの社会に必要な課題解決力は養えないということをお私たちはもつと意識すべきです。

遠藤 私は、教職10年目の研修で、アクティブラーニングの研究を行

い、グループでの学び合いを取り入れた授業に挑戦しました。生徒へのアンケート結果から、授業で学んだ知識を体系的に理解し、自ら発展させて考える生徒が多くなったなど、様々な手応えがありました。更に、校内模試の結果も他のクラスと比べて決して遜色はありませんでした。教材研究など乗り越えるべき課題はありますが、せつかく新しい学びの可能性を見いだしたので、いろいろな先生と情報交換をして自分を高めていくべきだと、川村先生のお話を聞いて強く思いました。教師も生徒と同様、勇気を持って踏み出さなければいけませんね。

安藤 大学進学とこれからの社会に必要な力の習得の両立は出来ないと、確たる証拠もないまま私たちが思い込んでいただけなのかもしれないですね。両立できるまでとことんやってみる決意が今こそ求められている気がします。大きく変化する社会を生徒がたくましく生き抜いていけるよう、私たち教師も挑戦し続けることが必要なのだと思います。